

国
(問題)
語

2019年度

〈2019 H31132020〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意

(1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

(2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	☒ 良い	☐ 悪い	☐ 悪い
マークを消す時	☐ 良い	☐ 悪い	☐ 悪い

- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章は、国木田独歩著『武蔵野』（明治三十四年刊）の一節である。現在、本学所沢キャンパスのある辺りも武蔵野と呼ばれていた。この文章を読んで、あとの問いに答えよ。

昔の武蔵野は萱原^{かんばら}のはてなき光景をもつて絶類の美を鳴らしていたようにいい伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林はじつに今の武蔵野の特色といつてもよい。すなわち木はおもに檜^{ひのき}の類いで冬はことごとく落葉し、春は滴るばかりの新緑萌え出するその変化が秩父嶺以東十数里の野いっせいに行なわれて、春夏秋冬を通じ霞に雨に月に風に霧に時雨^{ときり}に雪に、緑蔭に紅葉に、さまざまの光景を呈するその妙はちよつと西国地方また東北の者には解しかねるのである。元来日本人はこれまで檜^{ひのき}の類いの落葉林²の美をあまり知らなかったようである。林といえはおもに松林のみが日本の文学美術の上に認められていて、歌にも檜林の奥で時雨を聞くというようなことは見あたらない。自分も西国に人となって少年の時学生として初めて東京に上つてから十年になるが、かかる落葉林³の美を解するに至つたのは近來のことで、それも左の文章がおおいに自分を教えたのである。

「秋九月中旬というころ、一日自分がさる樺^{かば}の林の中に座していたことがあった。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおりなま暖かな日かげも射してまことに気まぐれな空合い。あわあわしい白雲が空一面にたなびくかと思うと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、むりに押し分けたような雲間から澄みて伶俐^{さか}し氣にみえる人の眼のごとくに朗らかに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上でかすかにそよいだが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する、おもしろそうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなおしゃべりでもなかったが、ただようやく聞取れるか聞取れぬほどのしめやかなささやきの声であつた。そよ吹く風は忍ぶようにこずえを伝つた、照ると曇るとで雨にじめつく林の中のようにすが間断なく移り変わった、あるいはそこにありとある物すべて一時に微笑したように、くまなくあかみわたって、さのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は思いがけず白絹めく、やさしい光沢を帯び、地上に散り布いた、細かな落ち葉はにわかになにに映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしつたような『パアポロトニク』（蕨^{わづ}の類い）のみことな茎、しかも熟えすぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみついて目前に透かして見られた。あるいはまたあたり一面にわかには薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立ちも、降り積つたままでもまた日の眼に逢わぬ雪のように、白くおほろに霞む——と小雨が忍びやかに、怪し氣に、私語するようにならばバラバラと降って通つた。樺の木の葉はいちじろしく光沢が褪めてもさすがになお青かつた、がただそちこちに立つ稚木のみはすべて赤くも黄いろくも色づいて、おりおり日の光りが今雨に濡れたばかりの細枝の繁みを漏れて滑りながらに脱けてくるのをあびては、キラキラときらめいた。」

すなわちこれはツルゲーネフの書きたるものを二葉亭が訳して「あいびき」と題した短編の冒頭にある一節であつて、自分がかかる落葉林の趣を解するに至つたのはこの微妙な叙景の筆の力が多い。これはロシアの景でしかも林は樺の木で、武蔵野の林は檜の木、植物帯からいうとはなはだ異なっているが落葉林の趣は同じことである。自分はしばしば思った、もし武蔵野の林が檜の類いでなく、松か何かであつたらきわめて平凡な変化に乏しい色彩いかなうものとなつてしまふ

a

するに足らないだろうと。

檜の類いだから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨がささやく。こがらしが叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲えば、幾千万の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かのごとく遠く飛び去る。木の葉落ちつくせば、数十里の方域にわたる林が一時に裸^{はだか}体になつて、蒼^{あお}ずんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武蔵野一面が一種の

b

に入る。空氣がいちだん澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞こえる。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睥視^{びし}し、黙想すと書いた。「あいびき」にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。この耳を傾けて聞くというところがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武蔵野の心に適^{かな}つていようだろう。秋ならば林のうちより起こる音、冬ならば林のかなた遠く響く音。

鳥の羽音、囀^{せむす}る声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声。叢^{くさむら}の蔭、林の奥にすだく虫の音。空軍荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹶^け散らす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗りに出かけた外国人である。何事をか声高に話しながらゆく村の者のだみ声、それらもいつしか、遠ざかりゆく。独り淋しそうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲声。隣の林でだしぬけに起こる銃音^{つつおと}。自分が一度犬をつれ、近処の林を訪^{おもむ}き、切株に腰を

かけて書はを読んでみると、突然林の奥で物の落ちたような音がした。足もとにねていた犬が耳を立ててきつとそのほうを見つめた。それぎりであった。たぶん栗が落ちたのであろう、武蔵野には栗樹くのみもずいぶん多いから。

もしそれ時雨の音に至ってはこれほど

C

のものはない。山家の時雨は我国でも和歌の題にまでなっている

が、広い、広い、野末から野末へと林を越え、杜もりを越え、田を横ぎり、また林を越えて、しのびやかに通りゆく時雨の音のいかにもしずかで、また鷹揚な趣があつて、優しくゆかしいのは、じつに武蔵野の時雨の特色であらう。自分がかつて北海道の深林で時雨に逢ったことがある、これはまた人跡絶無の大森林であるからその趣はさらに深い、その代り、武蔵野の時雨のさらに人なつかしく、ささやくがごとき趣はない。

秋の中ごろから冬の初め、試みに中野あたり、あるいは渋谷、世田ヶ谷、または小金井の奥の林を訪うて、しばらく座つて散歩の疲れを休めてみよ。これらの物音、たちまち起こり、たちまち止み、しだいに近づき、しだいに遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちてかすかな音をし、それも止んだ時、自然の静蕭せいしやうを感じ、永遠の呼吸身エタルニテに迫るを覚ゆるであらう。【A】武蔵野の冬の夜更けて星斗せいとう闌干らんかんたる時、星をも吹き落としそうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分はいしば日記に書いた。風の音は人の思いを遠くに誘う。【B】自分はこれらの凄風苦雨の音のたちまち近くたちまち遠きを聞いては、遠い昔からの武蔵野の生活を思いつづけたこともある。熊谷直好の和歌に、

よもすがら木葉かたよる音きけばしのびに風のかよふなりけり

というがあれど、自分は山家の生活を知っていながら、この歌の心をげにもと感じたのは、じつに武蔵野の冬の村居の時であつた。【C】林に座つていて日の光のもつとも美しさを感じるのは、春の末より夏の初めであるが、それは今こには書くべきでない。その次は黄葉の季節である。なかば黄いろくなかば緑な林の中に歩いていると、澄みわたった大空が梢々の隙間からのぞかれて日の光は風に動く葉末葉末に碎け、その美しさいつくされず。【D】日光とか確氷とか、天下の名所はともかく、武蔵野のような広い平原の林が隈なく染まって、日の西に傾くとともに一面の火花を放つというも特異の美観ではあるまいか。【E】もし高きに登つて一目にこの大観を占めることができるならこの上もないこと、よしそれができたいにせよ、平原の景の単調なるだけに、人をしてその一部を見て全部の広い、ほとんど限らない光景を想像させるものである。その想像に動かされつつ夕照に向かつて黄葉の中を歩けるだけ歩くことがどんなにおもしろからう。林が尽きると野に出る。

問一 傍線部1「時雨」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 春から夏にかけての時期、時を忘れるほど穏やかに降り続ける雨

ロ 夏の午後などに突然降ってくる、一時的な激しい雨

ハ 夏から秋にかけての時期、日の光が見える中で降る雨

ニ 秋から冬にかけての時期、時折降ったり止んだりする雨

ホ 冬に、雄大な風の動きで降り始め、長時間周囲を包むように降る雨

問二 傍線部2・3に「落葉林の美」とあるが、この文章で述べられている「落葉林の美」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 落葉林の、自然の景観そのままのたくましい生命力

ロ 落葉林の、天下の名勝にも匹敵するような伝統的美観

ハ 落葉林の、視覚だけでなく聴覚も含めて感じられる情趣

ニ 落葉林の、芸術家だけが味わうことのできる近代的芸術性

問三 空欄

にマークせよ。

a

c

に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄

イ	a	愛着	b	陶醉	c	浩然
ロ	a	謳歌	b	酩酊	c	雄大
ハ	a	欽慕	b	幻想	c	自若
ニ	a	珍重	b	沈静	c	幽寂
ホ	a	偏愛	b	興奮	c	清楚

問四

文章中の最終段落(「秋の中ごろから」以降、末尾まで)は、自然のとらえかたという観点から大きく二つに分けることができる。【A】～【E】のどこで分けるのが最も適切か。次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ【A】 ロ【B】 ハ【C】 ニ【D】 ホ【E】

問五

傍線部4「なかば黄いろくなかば緑な林の中」という表現には、現代の一般的な表現と文法的に少し違うところがある。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ「黄いろく」は形容詞の連用形のかたちであり、現代の言葉と同じだが、「緑な」は形容詞の連体形のかたちで、現代の表現とは異なっている。

ロ「黄いろく」は形容動詞の連用形のかたちであり、現代の言葉と同じだが、「緑な」は形容詞の連体形のかたちで、現代の表現とは異なっている。

ハ「黄いろく」は形容動詞の連体形のかたちであり、現代の言葉と同じだが、「緑な」は形容詞の連用形のかたちで、現代の表現とは異なっている。

ニ「黄いろく」は形容詞の連体形のかたちであり、現代の言葉と同じだが、「緑な」は形容動詞の連用形のかたちで、現代の表現とは異なっている。

問六

この文章の作者について、文章から読み取れるのはどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ この作者が育ったのはどこかわからない。東京に来てからの十年のうち、武蔵野に住んだことはない。

ロ この作者が育ったのは西国である。東京に来てからの十年のうち、武蔵野に住んだことがある。

ハ この作者が育ったのはどこかわからない。東京に来てからの十年のうち、武蔵野に住んだことがある。

ニ この作者が育ったのは西国である。東京に来てからの十年のうち、武蔵野に住んだことはない。

ホ この作者が育ったのは東京の市街である。大学生になって、改めて武蔵野の良さを知って住んでいる。

問七

この文章について述べたものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ この文章は、武蔵野の落葉林の美しい自然の景観に触発されて、作者が近代的な自我に目覚めていく様子を、深く掘り下げて考察しようとしている。

ロ この文章は、これまで日本の文学で取り上げられなかった武蔵野の落葉林の自然景観の美を、近代の翻訳文学の影響のもとに新たに見出そうとしている。

ハ この文章は、天下の名勝とはいえない武蔵野の落葉林にも古典文学、とくに和歌の自然観のすばらしさが横溢していることを近代的観点から見直している。

ニ この文章は、近代化で壊されていく武蔵野の落葉林の自然景観を守ろうとする、作者の自然環境への思いを具体的な美しい描写と共に縦横に述べている。

ホ この文章は、武蔵野の落葉林の自然景観の美を描いているが、近代の翻訳文学にならってその時間的推移を事実には忠実な写生によって描写している。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

しばしば、若干のテクノロジーが、社会を全体として被^Aフクする「文化」の全体を、自らの内に映し出しているという意味で、社会を代表してしまうことがある。つまり、「文化」の同一性を構成する結^Bセツ点に、特定のテクノロジーが位置づけられることがあるのだ。二〇世紀にとつて、自動車は、まぎれもなく、そのような特権的なテクノロジーの一つであった。だが、自動車が、二〇世紀を代表することができる、とわれわれが直観するのはなぜだろうか？

自動車という交通メディアは、もちろん、目的地までの移動時間を短縮するための道具として案出された。その点で、自動車は、芹沢俊介も述べているように——資本主義の精神に適合したメディアである。このような見地のもとでは、自動車をを用いた移動時間は短い方がよく、できることなら完全に無化されてしまうのが望ましい。したがって、自動車はどんどん加速していく。加速していくことは、自動車に与えられている社会的使命からくる必然なのである。資本主義は、できるだけ早く目的を現在に回収しようとする運動である。このことが、自動車に加速性を要求したのだ。イリイチャや山本哲士は、加速化が時間の a どころか、かえって時間の b をもたらすということを指摘して、自動車のこのような社会的あり方を批判している。第一に、加速を追求して人々が自動車による移動（他律移動）の比率を高めていけば、都市部では自動車が密集して、かえって速やかに移動することが困難になる。そして第二に、より一層重要なことは、次のことだ。すなわち、加速化は時間の商品化を代償にして進められるが、ゆとりとは商品化されていない時間の大きさなのだから、加速化による時間の a はかえって時間についての b 感の方を高めてしまうのだ。

だが、時代への自動車の適合性は、自動車のこのような道具的な有効性（そしてその逆説的な非有効性）からくるだけではない。やがて、自動車の運動性そのものが、それ自体として、享受されるようになっていくのだ。要するに、自動車で走ることそれ自体が、楽しい活動として自立するのである。 c の中では、過程を省略しようとする志向が強力に働く。ところが、過程を抹消しようとすることに関心の主要な部分が傾注されている間に、次第に肝心の目的の価値が希薄化して行き、目的に道具的に奉仕していた過程の方が、自己充足的に消費されるようになるのである。しかし、何のためでもない自動車の運動性そのものの快樂とは、何であろうか？ 自動車が遊園地と何らかの近縁性をもつのだとするならば、当然、それは、自動車で移動することの自己充足的な快樂を媒介にしているはずだ。タクシー会社（移動の効率性の追求）が、遊園地のための仕事に事業の中心を移し、自動車の対応物を遊園地の中に生産するにいたったという事実^{注1}は、資本主義的な目的追求が目的の価値を消尽してしまい、活動の重心が過程そのものに移行していく逆説的な連関を象徴しているだろう。

今日の遊園地が有している、最も直接に自動車のものとは何であろうか？ すなわち、乗物によって移動すること自身を享受させる遊具とは何であろうか？ それは、あのジェットコースターに違いない。

d

カイヨワ^{注2}が遊びを四つのカテゴリーに分類したことは、よく知られている。アゴン（競争）、アレア（偶然）、ミミクリ（模倣）、イリンクス（ e ）の四つである。自動車による加速の快樂を論ずる中で、芹沢俊介は、この四分類に依拠して、加速がもたらすのはイリンクスであると論じている。芹沢は、イリンクス以外の三つは、日常の現実と矛盾することはないが、イリンクスのみは違うと指摘している。イリンクスがもたらす日常の現実に対する外部性が、かえって日常を支持するという逆説が、資本制的な世界にはあるので、この指摘には全面的には賛同できないが、しかし、イリンクスが、基本的には、日常的な現実と最も強い緊張関係をもつことは間違いない。他の三つは、日常生活と矛盾しないだけではなく、そこに参入するための訓練でさえあるが、イリンクスだけは、基底的には日常の現実と対立している。

ともあれ、加速がイリンクスをもたらすことは間違いない。自動車は、すでに述べたように基本的には資本主義的な有効性に奉仕する道具でありながら、それに乗り走行する身体を、資本主義的な生産の論理が支配する日常の文脈から分離させてしまうのである。イリンクスとは、このような分離にともなう「自己意識」の特殊な再編を指しているのだ。そして、ジェットコースターは、自動車のもっているこのような局面のみを純化させたものだということができるだろう。それは、落下していく感覚を身体に加えることで、（重力を利用して）加速性を純粋化するのだ。ジェットコースターに乗って興奮したあと、マシンがやがて減速し地上に下りてくる瞬間は、なんともいえないうら寂しさを感じる。

それは、いったん日常の文脈から分離していた身体が日常に再統合されることからくる印象——つまり祭りの後の感覚と同じもの——であろう。

ところで、ここで注目すべきは、日本の現在の遊園地の基本的な方向性を決定した遊園地、この約十年間の圧倒的な成功によって社会現象にまでなった遊園地、つまりディズニールランドである。目下の文脈でディズニールランドが注目に値するのは、第一に、それがジェットコースターの²ようなものの、自動車のものとの間にある種の等価的な代理関係を有しているようにみえる、ということである。現在の——少なくともディズニールランドまでの——遊園地が中核的な売り物としてきたものは、いつでもジェットコースターの極限化された形態、すなわち絶叫マシンである。絶叫マシンとは、加速された速度によって、文字通り絶叫させるまでの恐怖を与えることになる遊具のことである。ディズニールランドにも、この種のマシンがいくつかあり、それらは、とりわけ人気を博している（スペース・マウンテン、ビッグサウダー・マウンテン）。しかし、ディズニールランドの場合、これらは決して中心的なアトラクションではなく、さまざまな遊び方の一つに過ぎない。ディズニールランドは、遊園地の全体によって、絶叫マシンのような快楽——加速がもたらす快楽——と等価なもう一つのやり方を提供したということになるのではないか？ あるいは、加速性を享受するジェットコースターのなものが、ディズニールランドの中に、発展的に解消していると理解することができるのではないか？ ディズニールランドに注目する第二の理由は、ディズニールランドが、個々の遊具の水準ではなく、遊園地の全体によってイリンクスを純粹に構成しようとする試みとしてあるようにみえる、ということである。周知のように、ディズニールランドの空間は、それぞれ固有のテーマを担った五つのゾーンに分割されている。その中で、ファンタジーランドが特権的であり、ディズニールランドという遊園地の全体の意味を代表している。ファンタジーランドの特権性は、第一に、それがディズニールランドの最深部におかれていること、第二に、ディズニールランドのすべての場所から見ることができ、唯一の建物であり、ディズニールランドそのものの象徴にまでなっている建物、すなわちシンデレラ城が、ファンタジーランドに所属していること、この二点によって示されている。ファンタジーは、日常の現実から分離した独自の空間として自律しようとする結果であり、そのことによって、諸身体を、ここに参入している限り覚めることのないイリンクスに誘い込むのである。

（大澤真幸『不気味なもの』の政治学』による）

（注1）タクシー会社（移動の効率性の追求）が、遊園地のための仕事に事業の中心を移し、自動車の対応物を遊園地の中に生産するにいたったという事実：浅草の遊園地「花やしき」を経営している会社が、もともとタクシー会社であったことを指している。

（注2）カイヨワ：ロジェ・カイヨワ（一九一三～七八）。主著『遊びと人間』など、遊びの研究で知られるフランスの社会学者。

問八 傍線部 A・B のカタカナの部分と同じ漢字を含むものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | |
|---|---|----------|---|---------|---------|------------|
| A | イ | フク飾関係の仕事 | ロ | フク面をかぶる | ハ | もとの形にフク元する |
| | ニ | フク数の選択肢 | | ホ | 地下のフク流水 | |
| B | イ | セツ礎琢磨 | ロ | セツ着剤 | ハ | セツ衷的 |
| | | | ニ | セツ足動物 | ホ | セツ灰岩 |

問九 空欄

a

b

（それぞれ二カ所ある）に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の

中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | |
|---|---|----|---|----|
| イ | a | 欠乏 | b | 剰余 |
| ロ | a | 剰余 | b | 浪費 |
| ハ | a | 浪費 | b | 節約 |
| ニ | a | 節約 | b | 欠乏 |

問十 空欄 c に入る表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 目的を現在化しようとする切迫
- ロ 快楽を最大化しようとする衝動
- ハ 結果を可視化しようとする要求
- ニ 時間を商品化しようとする思惑

問十一 傍線部「自動車は遊園地と何らかの近縁性をもつ」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 自動車も遊園地も代表的な二〇世紀のテクノロジーであり、共通した革新的な技術が用いられているから。
- ロ 自動車も遊園地も短期間で次々とリニューアルを繰り返すことにより、新奇性を追い求める二〇世紀の象徴的な存在であるから。
- ハ 自動車も遊園地も速さやスピード感を志向し、何かの手段としてよりもその運動性そのものが追求されるようになるから。
- ニ 自動車も遊園地も人々の新しい生活のスタイルを創出し、休日や郊外と結びついた娯楽の誕生に寄与するものであるから。

問十二 空欄 d は次の五つの文からなる一段落である。正しい順序に並べ替えたとき、最後（五番目）にく

る文はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ あるいは、より厳密には、加速と減速の反復であるというべきかもしれない。
- ロ なぜ加速は快楽をもたらすのか？
- ハ ジェットコースターの快楽の源泉とは何であろうか？
- ニ そして、自動車による走行が自己充足的に享受されているときにも、やはり快楽の源泉となっているのは自動車の加速性である。
- ホ それは、自動車がその道具的な有効性を追求していく中で獲得してきた要素とまさしく同じもの、すなわち加速性である。

問十三 空欄 e に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 攪乱 からん ロ 叫喚 きょうかん ハ 苦悶 くもん ニ 眩暈 げんうん ホ 渾沌 こんとん

問十四 傍線部「ジェットコースターの的なもの、自動車的なものとの間にある種の等価的な代理関係を有している」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ デイズニerlandの中では、ジェットコースターと自動車とが、まさに対等の関係で中心的な役割を果たしているということ。
- ロ 社会のなかで自動車が果たしている役割に見合う役割を、デイズニerlandでは、そのままジェットコースターが果たしているということ。
- ハ デイズニerlandにおいては、ジェットコースターが自動車の純化そのものであることが、よくわかる仕掛けになっているということ。
- ニ ジェットコースターや自動車の快楽に匹敵するものが、個々の遊具だけでなくデイズニerland全体に、組み込まれているということ。

問十五 この文章の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 自動車は、目的地までの移動手段を短縮するための道具として考案されたが、その目的以上に加速性を追求した結果、実用的な交通手段というよりは遊園地の遊具と同等の娯楽的な乗物とみなされている。
- ロ 資本主義的な目的追求は、ひたすら加速化をめざして過程を抹消しようとすることに傾注した結果、肝心の目的の価値が使い果たされて、過程そのものが享受されるという逆説を生ずるにいたった。
- ハ 遊園地のジェットコースターは、加速性がなによりも重視されるが、実はいかに減速できるかが重要なことであり、その加速と減速の繰り返しこそがスリルと醍醐味を生み出す源泉となっている。
- ニ カイヨワが遊びのカテゴリーとして分類したイリンクスは、日常の現実とはかけ離れている外部性によって、かえって日常生活と矛盾することなく結びつき、緊張緩和をうながす要因となっている。
- ホ デイズニールランドは、絶叫マシンなどの性能は高くないが、個々の遊具の水準によってではなく、それ自体が日常の現実から分離した独自の空間として、観客をイリンクスに誘い込む工夫がなされている。

(三) 次の文章は、平安時代最末期に成立したとされる説話集『宝物集』の中の、仏教の戒の一つ「不妄語」について述べた箇所から抄出したものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。

不妄語と申すは、見たることを見ずといひ、見ざることを見たるといひ、すべて虚言せぬを申したるなり。口の虎、身を食み、舌の劍、命を切るといふは、虚言をいましめてはべるなり。獄卒、地獄にして罪人に教へてはいはく、「妄語はよく大海を焼きつべし。いはんや、妄語の人を焼かんこと、草木の薪たきぎのごとし」といへり。地獄の薪となるものなり。つつしみて、虚言したまふまじきなり。

後世をつつしむのみにあらず。かしこき人は、この世には、いひつることをばたがへはべらざめり。徐君といひし人、季札といふ人の佩はきたる太刀をこひければ、「ものへ行くことのあれば、いま帰り来て、とらすべし」といひて去りぬ。季札、帰り来りて、こひし劍をとらせんがために、徐君をたづぬるに、「はやくうせにき」といひければ、徐君がつかをたづねてぞ、こひける太刀をかけはべりける。徐君がつかの上に季札が劍をかくといふは、これなり。この心を思ひて、

なきあとにかけたるたちもあるものをさやつかのまにわすれはつべき

俊頼朝臣【和歌A】

とは詠むなり。近くは、紫式部が虚言をもつて源氏物語を作りたる罪によりて、地獄に落ちて苦患くげんしのびがたきよし、人の夢に見えたりけりとして、歌詠みどもの寄り合ひて、一日経書きて、供養しけるは、おぼえたまふらんものを。ただし、例へば、狩人の鹿を追ひうしなひて、「これより鹿や行きつる」と問はんに、あの草の中にありとは知れども、「知らず」といはんは、虚言2にあるべからず。仏、許したまふなり。すべてかやうなる虚言は、咎とがになるべからず。このほかの虚言は、よくよくつつしみたまふべし。

源信僧都の、年のはじめには、かならず朝覲てうきんの行幸を見たまひければ、御妹に安養の尼と申しける人の、このことをあやしみて、「君は無極の道心の人なり。何の料に、年としごとに朝覲の行幸を見たまふぞ」と問ひたまひければ、「昔の戒力によりて、いま、十善の位に生まれたまへるがなつかしさに、見たてまつるなり。また、大臣公卿よりはじめて、あやしの唐傘持てる者にいたるまで、前世の戒力によりて差別のあるを見るに、過去遠々の流転の観ぜらるるなり」とぞのためひける。すみやかに、天の瓶を割らざるがごとくにつつしめ、鉢の油をこぼさざらんがごとく恐れて、仏道をもとめたまふべきなり。天の瓶を割らざるがごとくにつつしめといふは、貧しき人、天の瓶を得て、瓶の内より七宝を出だしてたのしくなりぬ。³心地のおきどころなきままに、舞ふほどに、天の瓶を踏み割りて、また元のやうに貧しくなることなり。鉢の油をつつしむがごとくといふは、よくつつしめば、油こぼれず、あらくつつしまざれば、こぼることなり。

虚言の歌、おほくはべるめり。

たのめつつあはでとしふるいつはりにこりぬころを人はしらなん

凡河内躬恒【和歌B】

(注) 朝覲の行幸：天皇が年頭などに父母の御所へ行き、恭敬の礼を行うこと。

問十六 傍線部1・3の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- 1 イ すでに死んでしまった。
ロ どこかへ行ってしまう。
ハ とつくに姿をかくした。
ニ もう無くしてしまった。
- 3 イ 心をふるいおこす手立ても無いままに、
ロ 心をしばらく託す場所も無いままに、
ハ 心をおちつける方法も無いままに、
ニ 心をめぐらす時間も無いままに、

問十七 【和歌A】の下の句には、上の句の語と呼応して縁語をなす語を見出すことができる。その語はいくつ数えることができるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 一語 ロ 二語 ハ 三語 ニ 四語 ホ 五語

問十八 傍線部2「虚言にあるべからず」とあるが、なぜそうだというのか。その理由として考えられる最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 食料を得ようとしてなす行為は、人間が生きていくためにはどうしても必要な営みであるから。

ロ 犯罪行為を目の前にして、自らを守るためどんなことを行っても、緊急避難として許されるから。

ハ 草の中に隠れた鹿を自分でも目視できない場合は、その所在を示さなくても虚偽とはならないから。

ニ 殺生の罪をまぬがれるために嘘をつくことがあっても、それは方便として許容される所為であるから。

ホ 正直に答えなくても、仏に祈りさえすればどんなことも許されるのが、仏教の有り難い利益であるから。

問十九 本文の第三段落、源信僧都の逸話の箇所付した波線部a～eの敬語表現のうち、敬意の対象者が他と重ならないものが一つある。それはどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ a ロ b ハ c ニ d ホ e

問二十 【和歌B】は、「人」に対してどのような思いを表出していることになるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ふかく信頼を寄せてきた「人」の裏切りを、自分は決して許すことができない。

ロ 「人」の約束などいくらあてにしても甲斐のないことを、思い知ってしまった。

ハ いつかは自分の誠意が「人」に伝わることを、ひたすら祈り続けるだけである。

ニ 逢うことができぬ年月の長さに閉口し、「人」への関心も失せ果ててしまった。

ホ 何年にもわたり逢瀬を果たさないままの関係だが、「人」への愛は揺るがない。

問二十一 本文の内容と合致するものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 仏教徒はどんな場合にも、事実と異なることを口にしてはならない。

ロ 賢人は誰も執着心を持たないので、物事に対し恬淡とした態度を示す。

ハ 名作源氏物語の作者も、虚構の作品を書いた罪からは遁れられなかった。

ニ 源信は天皇に転生することを切に願い、毎年行幸を見物に出掛けたという。

ホ 天の瓶に油を注ぎ入れた以上は、決してこぼれぬよう慎重に扱う必要がある。

問二十二 左の文章は、本文中に二重傍線を付した「季札」について記す『史記』「呉太伯世家」中の一節である。以下の問いに答えよ。なお、返り点、送り仮名を省略した部分がある。

王 寿 夢 卒。^ス 寿 夢 有^リ 子 四 人。長^ヲ 曰^ヒ 諸 樊、次^ヲ 曰^ヒ 余 祭、次^ヲ 曰^ヒ 余 昧、次^ヲ 曰^フ 季 札。季 札 賢^{ナリ}。而^{シテ} 寿 夢 欲^ス 立^{テント} 之^ヲ。季 札 讓^{リテ} 不^レ 可^キ。於^ニ 是^ニ 乃^チ 立^テ 長 子 諸 樊、⁴ 撰 行 事 当 国。王 諸 樊 元 年、諸 樊 已^ニ 除^レ 喪、讓^ル 位^ヲ 季 札。季 札 謝^{シテ} 曰^{ハク}、「曹 宣 公 之 卒^{スルヤ} 也、諸 侯 与^ニ 曹 人 不^レ 義^{トセ} 二 曹 君。将^ヲ 立^{テント} 子 臧^{ギウヲ}。子 臧 去^リ 之^ヲ、以^{ツテ} 成^{セリ} 二 曹 君。君 子 曰^{ハク}、『能^ク 守^{ルト} 節^ヲ 矣^ニ』。君 義 嗣 也、誰 敢⁶ 干 君。有^{タモツハ} 二 国 非^{ザル} 二 吾 節^ガ 也。札 雖^{ヘドモ} 不 材^{ナリト}、願^{ハクハ} 附^{セント} 二 子 臧 之 義^ニ」。呉 人 固^ク 立^{テントス} 二 季 札。季 札 棄^{サテテ} 二 其 室^ノ 而 耕^ス。乃⁷ 舍^ス 之^ヲ。

- (1) 傍線部4「撰行事当国」の読み下し文として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ こうじせつしまさにくになすべし。
ロ こうをせつしてとうこくにつかへしむ。
ハ せつをこうせばことまさにくにたるべし。
ニ ことにあたりてはくにをせつこうする。
ホ ことをせつこうしくににあたらしむ。

- (2) 傍線部5「君」は文章中の誰を指すか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ 寿夢 ロ 諸樊 ハ 曹君 ニ 子臧 ホ 君子

- (3) 傍線部6と同じ意味で用いられる「干」の字を含む語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ 干城 ロ 干拓 ハ 干犯 ニ 若干 ホ 欄干

- (4) 傍線部7「乃舍之」の主語は誰か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ 諸樊 ロ 曹君 ハ 子臧 ニ 呉人 ホ 季札

〔以下余白〕

